

# 急性期病院における摂食・嚥下リハビリテーションの現状と在宅への連携の試み -金沢医療センターと金沢在宅NST 経口摂取相談会-

村上美矢子<sup>†</sup>

第67回国立病院総合医学会  
(平成25年11月9日 於金沢)

IRYO Vol. 68 No. 11 (549-553) 2014

## 要旨

金沢医療センターでは平成22年度から、入院後の早期経口摂取開始へ向け、入院時に行う患者の状態アセスメントの中に、嚥下評価としての「摂食・嚥下機能評価マニュアル」を導入し一定の成果を得ている。

昨年度、言語聴覚士 (Speech Therapist : ST) による摂食・嚥下リハビリテーション (リハ) 対象は346名であった。そのうちの47%が超高齢者 (85歳以上) であり、廃用予防や機能維持がST介入の中心であった。転帰は、回復期病院への転院10%、自宅退院21%、施設への退院29%、療養型病院への転院23%、死亡17%で、そのうち1年以内の再入院・再嚥下リハ実施が全体の13%であった。

結果から、急性期症状が改善しても再入院を繰り返すもの、転帰後も適切な介入が必要なもの、加齢にともなう基礎体力の低下や栄養吸収・代謝の低下などに陥りやすいもの、退院後の介助者を含む環境への支援不足などの現状が指摘された。地域での摂食・嚥下障害を有する高齢者の実情が浮かび上がってきたと思われ、急性期病院から地域への一貫した円滑な移行が課題である。

当地域の活動の一つに「金沢在宅NST 経口摂取相談会」(以下、相談会)がある。2004年発足以来、医師・歯科医師・栄養や摂食・嚥下に関わる専門職チームが在宅や施設へ訪問し、評価を行いその後の支援内容をアドバイスしている。

今年度、当院の地域連携室退院調整看護師や理学療法士 (Physical Therapist : PT)・ST有志は、摂食・嚥下障害患者の在宅ケアへの円滑な移行をめざし相談会との連携を模索した。この相談会は、病院スタッフにとって在宅医療を学ぶ場でもあった。

これらの経験から今後は、各地域に退院後の経過と変化を生活の観点から改めて調整し支援できる、相談会のような在宅栄養サポートチームのエキスパートというべき機能の普及と充実が望まれる。

キーワード 急性期病院, 地域, 摂食・嚥下障害患者, 栄養サポートチーム

国立病院機構金沢医療センター †言語聴覚士  
(平成26年2月28日受付, 平成26年5月9日受理)

Attempt of Cooperation between the Home and Current State of Dysphagia Rehabilitation of Acute Care Hospitals : Kanazawa Medical Center and Kanazawa Home Care NST

Miyako Murakami, NHO Kanazawa Medical Center

(Received Feb. 28, 2014, Accepted May. 9, 2014)

Key Words : acute phase hospital, community setting, dysphagia patients, Nutrition Support Team